

気管支喘息の根治療法をめざして

井上 洋西

岩手医科大学内科学第三講座 教授

ここ10数年の気管支喘息の病態生理の解明、それに基づく治療法の発展は喘息治療の飛躍的な進歩をもたらしました。現在もっとも推奨される方法はステロイドの吸入療法ですが、毎日の吸入が必要ないわば対症療法であり、根治療法は未だ開発されておられません。また、この治療法は気道粘膜の免疫系をすべて抑制する方法であり、生体にとって本来生理的なものとはいえません。

アレルギーの研究はRicher とPortierのアナフィラキシーの発見(1902年)に始まります。この2人のフランスの学者はモナコ国王の招待に応じて観光地であるモナコ海岸のクラゲ毒対策のために海洋調査を行い、帰国して後、入手可能なイソギンチャクの毒素の研究をおこないました。少量の毒素を注射しても無症状であった犬に数週後再度同量の毒素を注射したところ、激的な下痢や吐血、呼吸困難を生じ、この犬は死亡しました。1796年のイギリスのJennerの種痘に始まる「疫病をのがれる」はずの免疫が、アナフィラキシーとして「宿主を殺す」こともあるとの発見は、当時驚きとして迎えられました。von Pirquet (1906)は、感染防御に必須である免疫に対し、生体にとって不利益な過敏症を統合する概念として「アレルギー」という言葉を提唱したが、1950年代になっても、なぜ免疫応答の結果が時には免疫として働き、時には過敏症(アレルギー)としてのアナフィラキシーとして働くかは長い間議論的でした。何か悪さをする物質が介在すると考え、これをレアギンと呼びましたが、この物質の正体は不明でした。

この論争に終止符を打ったのが、石坂公成先生のIgEの発見です。この発見によりアトピー性喘息といわれる喘息群の病気の原因は解明されましたが、非アトピー性喘息の病気の原因は未だ解決されていない状況にあります。この非アトピー性喘息という群は、重症化・難治化し易く、治療も比較的困難です。

この非アトピー喘息の関連遺伝子の研究は、理研の中村祐輔先生を核とした遺伝子研究の一環として理研の遺伝子多型研究センターの玉利眞由美先生をリーダーとする共同研究として当科講師の鹿内俊樹君と中村豊君が取り組みを始めたところでした。この研究を通じて、気管支喘息の原因の全容が解明され、喘息の根治療法が確立されることが期待されます。

講演者プロフィール

1971年 東北大学 医学部卒業後、1973年 初期研修終了後、同 第一内科に入局。1977年 米国ワシントン州バージニアメイソン研究所留学、帰国後1980年より 東北大学 第一内科助手・講師・助教授を経て、1993年 岩手医科大学 第三内科主任教授に就任。現在に至る。

日本内科学会、日本呼吸器学会、日本アレルギー学会など各学会において評議員や理事を務める。2005年 第55回日本アレルギー学会学術大会会長。

1988年 日本胸部疾患学会賞「熊谷賞」、1990年 東北大学医学部奨学賞「金賞」